「個」の育成の申し子

大久保嘉人（39）＝セレッソ大阪FW＝

選手権と小嶺先生 ■1■

この冬、第100回の節目を迎える全国高校サッカー選手権。その歴史を語る上で欠かせないのが長崎の名将、小嶺忠敏（76）の存在だ。国見で打ち立てた優勝6回は戦後最多。指導者生活50年が過ぎても現場に立ち続け、トップ選手を輩出している。高校サッカーにスポットを当てた企画「100回目の冬へ」の連載第3弾は、小嶺の名だたる教え子たちに高校時代を振り返ってもらい、名将たるゆえんを探った。

（この連載は運動部・中島宙が担当します）

100キロを越える巨漢物だった。往復12キロのロードワークは「狸山」と呼ばれ、100～500メートルのダッシュを10本程度繰り返す通称「マグロ」は、グループ内の全員が設定タイムでゴールしなければいけない。泥くさい練習を乗り越えて、戦う心が養われた。

「試合の踏ん張りどころとか、ゴールが必要な時とか。ちょっとでも妥協したら危ない場面は国見のころの走りを今でも思い出す」

もっとも走り込みはチームの土台にすぎない。勝てるチームをつくるもう一つの大きな要素が「個」の育成だ。

「誰にでも絶対長所はある」

「先生がいつもみんなに言っていたのが、とにかく長所を伸ばせと。自分の長所が何なのか分からないかもしれないけど、誰にでも絶対長所はあるからって」

小嶺は選手一人一人の長所を見つけるのがうまい。大久保にとってのそれはドリブルであり、シュートだった。部活後にコーンを並べてドリブルからミドルシュートの練習を1時間弱。こうして日本を代表するストライカーが誕生した。

◇　◇　◇

選手の性格やその時々の空気感で、アメとムチを使い分けるのも小嶺ならではだ。

ある試合で、熱くなりすぎた大久保が一発退場を食らったことがあった。当時から負けん気が強かった少年もこの時ばかりは「ヤバい。ボコられる」とおびえたが、それを見た小嶺は「嘉人、おまえは退場したから弁当2個食え」とジョークを一発。これで縮こまるよりも、思い切りのいいプレーを続ける方が教え子のためになると分かっていたのだろう。

逆に、物事がうまくいっている時ほど小嶺は厳しかった。

インターハイで優勝して、小嶺を胴上げしようとみんなで駆け寄った際は「このくらいで喜んでどうする」とこっぴどく叱られた。国体を制しても、選手権で得点王と8年ぶりの優勝旗を手にしても同じ。「勝ってかぶとの緒を締めよ」。そう言って、淡々とした表情でバスに乗り込むのがお決まりだった。

おまえたちにはまだまだ可能性がある。満足せずに、もっと大きく成長しろー。後々の人生まで考えた愛のむちだったのだと今は思える。

（敬称略）

インターハイ、国体、選手権の高校３冠で一躍その名をとどろかせた大久保。国見で抜群の得点感覚を培った
＝2001年１月、東京・国立競技場

39歳になった今もストライカーとして活躍する大久保
＝2021年6月、大阪市のヨドコウ桜スタジアム

おおくぼ・よしと　国見高３年でインターハイ、国体、全国選手権の３冠を達成し、プロへ。欧州移籍を経て2013～15年に川崎で史上初の３年連続得点王となり、今季は15年ぶりにC大阪に復帰した。Ｊ１通算191ゴール。元日本代表。福岡県出身。